



島の知恵揺れる

白井正夫 朝日新聞編集委員

東シナ海のこしきじま 甌島に思い立って電話してみたのは、きっとそのせいである。長年の取材先の中でなぜか、いつも頭の隅から離れない人や場所がある。鹿児島県の離島である甌島も、そうした1つだった。

電話の向こうは里村高齢者生活福祉センター「もやーど里」。たまたま居合わせた「もやーど友の会」の庵地吉市会長(70歳)がでてきて、ちょうど良かったとばかりに長話になった。「宿直ボランティアの補充がつかなくなりましてね、いまもみんなで相談していたところですよ。何か良い知恵ありませんか。」

薩摩半島の西方約30~50キロに甌島列島がある。上、中、下と3つの島が南北に細長く連なり、4つの村に約8000人が生活している。里村は列島の北端にあり、1つの集落に約1700人が暮らすこぢんまりとまとまった村だ。盛んな漁業も「捕る」から「育てる」に広がり、また近年はダイビング、ボートセーリングなどマリンスポーツの観光スポットとしても注目されている。

離島の高齢者問題は山村とおなじく住民に重くのしかかる。里村も高齢化率が30%を超えたのは10年前のことで、現在は40%に迫っている。それだけに住民の取り組みも早かった。

助け合いを意味する島の言葉「もやー」に「宿」を合わせて名付けた「もやーど里」ができたのは1994年。村がつくり、村社協が運営を委託されている。

デイサービスセンター、介護支援センターに「島の老人ホーム」ともいえる老人居室を併設した複合施設だ。同じ建物には村立保育園もあり、集会所や広場には老幼が一緒になって楽しむ時間も生まれる。

■ 住民宿直が支え ■ 甌島のホーム

電話で話になったのは、10室ある老人居室を支えているボランティアによる「住民宿直」活動である。

村には何らかの支援が必要な独り暮らしの高齢者が約40人いる。それだけに通年生活できる老人居室の入居希望は多く、いつも満室だ。夜はセンター職員1人が宿直するが、他にボランティアも毎日1人が午後5時から翌朝7時30分まで宿直する。発足時にはボランティアは40人もいて月1回の宿直ですんだ。それが島を離れる人がでたり、高齢になったり、家族の介護に手を取られたりで減る一方。現在は登録者30人の中には名簿だけの人もいて、5~6人が月2回泊まらないと回らなくなった。村の住民も少しずつ減る状況では、新しく宿直に参加してくれる村民を探すのも難しい、というのだ。

この住民宿直はすばらしい活動と思う。介助が必要な人もいる10人の高齢者を一夜世話するのは、一人の宿直員ではやはり心許ないだろう。食事からおしめの取り換え、ひんぱんになる呼

び鈴。人手は多いほど助かる。では、職員宿直を2人制にすればとなるが、センター職員20人の中でも毎月2回の宿直をする人がでており、これを4回に増やすというのも酷だ。だから、住民宿直があってこそ「島のホーム」が成り立っている。

社協職員で「里」のソーシャルワーカーの本めぐみさん(27歳)は、2年前に友の会会員となった。昨年11月も4日と27日の2回、ボランティア宿直をした。結婚して半年なのに月2回は、夫の理解と協力がなければ、とてもできない。

ボランティアは午後5時から活動が始まる。センターがつくった夕食の配膳から食事の相手、後かたづけ。食事がすむと、入居者の話し相手や昼間のボランティアさんが洗濯した衣類のアイロンがけが待っている。何もなければボランティア専用の宿直室で休めるが、宿直職員1人で手に負えないことがあれば深夜でも起きて手助けしなければならない。朝は午前6時から7時にかけて村内の独居老人宅へモーニングコール。十数人に安否確認の電話をしていると、入居者は食堂で朝食を待っている。

「里」には宿直の他に昼間の洗濯、シーツ交換、話し相手など3つのボランティア班があり、それぞれ住民10人ほどが参加している。宿直の登録会員は現在30人で、うち16人が女性。主婦、定年退職者、漁師、郵便局員、学校教師などいろいろな人がいるが、本さんのように社協職員でありながら参加している人が4人もいる。男子職員の場合は、毎月勤務で2回、ボランティアで2回泊まる例もでている。

センターが発足した当時、老人居室は話題になった。例によって九州の各地から視察団が島にやってきた。そしてほとんどの視察団が「うち(の町、村)では無理だな」の言葉を残して帰りの船に乗った。

当時の「里」館長の中村正人さんによると、住民1700人の村で40人もの宿直ボランティアがいることにも驚いて帰るが、自治体関係の視察団には社協職員がアフター5に自分の職場でボラ

ンティア活動することが、どうにも信じられない様子だったという。中村さんも館長時代は毎月勤務で2回宿直しながら、ボランティアでも1回泊まっていた。

ボランティア減に 離島の現実

友の会会員には「ボランティアやってるゾ」というような気負いはない。本さんも、中村さんも「村民の1人として参加した」とこともなげに話して自然体だ。村にこの空気が生まれるまでには、「里」づくりについて村役場と住民、また住民同士が5年間もゆっくりと、時間をかけて話し合ってきたプロセスがある。離島には人数、施設にも限りがあり、足らないものは地域のみんが助け合うことで補う島特有の伝統がある。「島に生きる知恵」でもある。

島にボランティアの組織的な活動が芽生えたのは13~14年前にさかのぼる。村の診療所に通院する体が不自由な高齢者の送り迎えで始まった。村の集落は島と島とを結ぶ砂州に1つだけまわっている地の利も幸いして、送迎も短時間で済むことから、住民も活動にスムーズに参加できた。

やがて村に独り暮らし者が目立ち始め、老人ホームづくりが住民の願いになった。しかし、本格的なホームになると財政、運営とも厳しい。そこで新設する複合施設に老人居室を併設する計画になるが、これも限りある職員数などから運営には住民協力が欠かせない。どうしたらいいのか、それを5年間議論した。そこから、住民の理解が生まれ、多くの人が参加して、無理なくできる「住民宿直」が誕生した。

世にも稀有な活動も数年を経て、離島の現実がまた顔を出し始めた。

庵地会長も宿直の当番表づくりに苦労する月が続くようになった。「月に2回、3回となると、負担になって活動にマイナスになりはしないか」。島勤務の後任者がいないまま隣村にある銀行支店に定年まで勤めたという会長さんも、大弱りである。高齢者のためのボランティア活動が、島の高齢化の影響をもろに受けて、足元が揺らぎかねない状



宿直ボランティアが食事介助をしている所です。

鹿児島県里村の「もやーど里」で

態なのだ。

日本全国では岩礁もいれて6852の島がある(海上保安庁水路部)というが、離島振興法など法の指定対象となり、「生活」がある島が330。そのうち七つの島がある瀬戸内の笠岡諸島を岡山県笠岡市の福祉船「夢ウエル丸」(99トン)が巡回している。

デイ定員重く 笠岡諸島の福祉船

最も大きい北木島から小さな小飛島までの7島の住民は3800人。市内の高齢化率が23%なのに島部は41%だ。夢ウエル丸は93年に市が2億円をかけてつくり、日本で初めての福祉船として就航した。

長さ25mの船はリハビリ室、一般用と障害者用の浴槽、懇親室、遊歩甲板がある「デイサービスセンター船」である。寄港した島で体の不自由な人を送迎する電気自動車も乗せている。毎日、市福祉事務所の生活指導員中塚俊夫さんと街部にある特養ホームの看護婦、寮母、それにボランティアさんが乗り、7島の9つの港を毎日1か所ずつ順番に回る。これで島部の老人も街部と同じくデイサービスを利用できるようになった。船でも陸同様に入浴、リハビリ、レクリエーション、給食で半日が過こせ、ほかに血圧測定、介護相談、生活指導もある。

ところが、「島の福祉船」も思わぬ悩みをかかえてしまった。

福祉船はデイセンターと同じ扱いは

できない、とする国との折衝に難航した末に95年、ようやく国が要綱で定めるデイセンターB型(定員15人)の認定を受けた。船の大きさや利用者数をにらんでのB型だったが、昼の給食(利用者は400円)が思わぬ悩みの種になった。

各島とも福祉船の寄港は月に2~3回しかないで、市は希望する老人には全員利用してもらった。その結果、港で船の到着を待つ老人が多く、連日30人前後が乗船する。初めは年間4000人だった利用者が97年度には6400人と増えた。

街の港を出航する時、契約した福祉施設から給食のおかず15人分が船に積み込まれる。公費補助を受けるB型デイの給食定員でもある。船内で炊いたご飯を詰めた温かい給食弁当ができる時間になると、定員外の人たちは下船しなければならない。毎日半数近くが自宅や食堂で昼食をとる。

船で給食をとれる15人の選定は、喧嘩にならないよう地区にまかせているという。地区によっては、民生委員が順番を決めたり、年齢順にしたりしている。中塚さんは「温かい弁当ができるころ、船を下りていく年寄りの背中を見るのはいつもつらいです」と話している。

風光きらめく離島も過疎、高齢化で揺らいでいる。その島にも、島ならではのすばらしい創造力がある。その結晶が「住民宿直」や「福祉船」だと思う。それがまた、島特有の異常な高齢化で揺らいでいる。